

AMDA

多様性の共存

ジャーナル

2026 年 1 月 25 日 VOL.49 第 316 号

発行 / AMDA 〒700-0013 岡山市北区伊福町 3-31-1 2026 年

TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717

E-mail: member@amda.or.jp

冬号

冬

救える命があればどこまでも

「共に歩む架け橋」

AMDA 理事長 佐藤 拓史

特定非営利活動法人アムダ (AMDA)

<https://amda.or.jp/>

特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構

<https://www.amda-minds.org/>

特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター

<https://www.amdamedicalcenter.com/>

AMDA 兵庫 <http://amda-hyogo.com/>

日頃より AMDA の活動に温かいご理解
とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

昨年も世界各地で自然災害が相次ぎ、多
くの人々が突然、厳しい状況に置かれる一

年となりました。そのような中で AMDA は、「今、必要とされている医療を必要な人
へ届ける」という原点を忘れることなく、現地の仲間たちと手を携えながら活動を続
けてまいりました。

昨年 3 月のミャンマー大地震では、発災直後より現地ネットワークと連携し、医療・
生活支援を中心とした緊急支援活動を実施しました。10 月にはフィリピンのセブ島
およびミンダナオ島での地震、11 月には台風 26 号による広範な洪水被害、12 月
にはインドネシア・スマトラ島での豪雨被害に対応し、被災地の状況に応じて生活支援
や地域保健、感染症対策を重視した支援を行いました。また、ウクライナ、インド、
アフガニスタンなどにおいても、継続的な支援活動を続けております。

AMDA は、平時からの医療人材育成にも力を入れています。私自身も医師として、モンゴルやネパールにおいて現
地医師を対象に内視鏡診断・治療の技術指導を行ってきました。医療人材育成は、現地医療が将来にわたり自立的に
発展するための重要な基盤だと考えています。

こうした活動は、岡山をはじめ日本各地から応援してくださる多くの方々の支えがあってこそ成り立っています。皆
さまの想いに、改めて心から感謝いたします。

また昨年は、公益財団法人大原芸術財団と包括連携協定を締結しました。医療・人道支援と文化・芸術という、そ
れぞれの分野が持つ特性を活かし、人々の心と命の双方に向き合う新しい社会貢献のかたちを、岡山から創り出してい
きたいと考えています。

新しい年も AMDA は、多国籍・多文化協力のもと、緊急医療支援にとどまらず、地域に根ざした医療、人材育成、

そして災害に強い社会づくりに取り組んで
まいります。支援する側、される側という
立場を越え、共に学び、共に歩んでいく関
係を大切にしながら、着実に前へ進んでい
きたいと考えています。

世界には今も支援を必要とする人々が
います。そして同時に、何かできることは
ないかと願う人々もいます。AMDA は、その
思いをつなぐ架け橋であり続けたいと願っ
ています。

本年も引き続き、皆さまのご支援とご協
力を賜りますよう、心よりお願い申し上げ
ます。皆さまにとって、この一年が健康と希
望に満ちたものとなりますよう祈念してお
ります。



フィリピン・セブ島およびミンダナオ島地震被災者緊急支援活動

2025年9月30日、フィリピン中部のセブ島沖でマグニチュード6.9の地震が発生。続いて、10月10日、フィリピン南部ミンダナオ島沖でマグニチュード7.4と6.8の地震が相次いで発生しました。地震発生直後より、AMDA フィリピン支部および現地協力団体 Asian Center of Excellence in Development and Security (ACEDS) と連絡を取り合う中で、両者から AMDA へ支援要請がありました。これを受け、日本から看護師2名、調整員1名からなる救援チームをフィリピンに派遣。さらに、日本人看護師1名と現地調整員1名がフィリピン各地からチームに合流し、支援活動を行いました。



©Dr. Elisse Nicole Catalan



岡山を出発する派遣チーム

< 10月12日～17日：ミンダナオ島での活動 >

日本から派遣された一行は、10月12日に岡山を出発し、翌13日に、ミンダナオ島とともに活動を行うフィリピン支部およびフィリピン空軍と、同島のダバオ空港で合流しました。翌日から2日間かけて、フィリピン支部、空軍予備役関係者ならびに現地ボランティアの方々にご協力いただき、支援物資の買い出しと、梱包などの準備を夜中まで行いました。

16日、チームは二手に分かれて活動しました。1つ目のチームは、拠点としていたダバオから車で片道7時間程かかる、被災地の中でもアクセスが困難なダバオ・オリエンタル州カラガ町に向かいました。町内の大学、コミュニティーセンター、ヘルスセンターの各代表者に、合計300世帯分の食糧（お米5kg、インスタント麺、魚やコーンビーフの缶詰、コーヒー、クラッカーなど）を預け、後日、それらを各代表者から被災した

世帯に配布していただきました。

2つ目のチームは、ダバオ市トリル区にある2つの小学校で、子どもを対象としたメンタルヘルスプログラムを行い、230人以上が参加しました。参加者はグループに分かれて、地震が発生した時の様子を絵に描いて発表。「今後地震



メンタルヘルスプログラム（ミンダナオ島）

があったらどうしたいか」「自分は将来どうなっていたいか」などの質問に答えたりしました。また、懐中電灯、救助ホイッスル、飲料水などの防災グッズと、絆創膏、ハサミ、濡れティッシュ、マスクなどの応急処置キットが配布されました。

翌17日は、震源に近いダバオ・オリエンタル州マナイ町で活動しました。この日は、メンタルヘルスプログラムに加えて、医師による診察と薬の処方も行われ、地元住民100人が受診しました。メンタルヘルスプログラムに参加した約300人の子どもたちには、水筒、救助ホイッスル、マスクなどが配られました。



空軍との物資支援（カラガ町）

< 10月18日～21日：セブ島での活動 >

10月18日、セブ島に移動した派遣チームは、フィリピン支部とともに、セブ州知事を表敬訪問し、ミンダナオ島での活動とセブ島での活動予定を報告しました。知事は災害大国である日本からの被災地支援に謝意を述べられ、災害発生時に被害を最小限に留めるために行う、日本の防災訓練に関心を示されました。



セブ州知事を表敬訪問



メンタルヘルスプログラムの様子（セブ島）

報告がありました。日本からの派遣チームは全ての活動を終え、10月22日に帰国しました。

帰国後の報告会で、派遣されたスタッフは、「被災地では地震の揺れに慣れていない方が多く、私たちが気付かない震度1程度の揺れにも敏感に反応する。頻度は減少傾向にあるものの、余震は続いており、簡易テントを立てて暮らしている方も大勢いた」と話しました。

現地では、度重なる余震により不安定な生活が続いており、今後も被災者のメンタルケアが必要になる可能性が考えられます。AMDAは引き続き、現地と連絡を取り、被災地のニーズに応じて支援を検討していきます。（岩尾 智子）

翌19日、震源近くのセブ島北部に位置するメデリン町北ラミンタックと南ラミンタック地区で医療相談と子どもを対象としたメンタルヘルスプログラムを実施し、200人以上が参加しました。子どもたちにはお菓子などの物資も配布しました。

20日には、ACEDS関係者に調整していただき、メデリン町長を表敬訪問しました。これまでの活動を報告するとともに、町内の被災状況を確認し、意見交換を行いました。

後日、メデリン町から「AMDAからの支援により、災害対応などの緊急時に使用する備品として、倒木伐採用のチェーンソー、道路の亀裂等を注意喚起するための警告テープ、一時的な避難所として利用可能なテント、安全手袋を購入した」と



フィリピン支部医師による医療相談（セブ島）

フィリピン台風26号被災者緊急支援活動



家族に、お米やインスタント麺など食料品を中心とした物資支援を行いました。物資の梱包や配布の際には、フィリピン看護協会カタンドゥアネス支部、ならびに同州のコロンバス騎士団(the Knights of Columbus)のメンバーにご協力いただきました。

今回の台風では海岸沿いの地域に大きな被害が見られました。高潮の影響で海岸沿いに建つ多くの家が流されたということです。住民の一人は、「前日から台風が来るとアナウンスがあった。台風が来た時は避難所にいたので命は助かったが、戻ってきたら全てが流されていた」と話していました。また、今回家を失った方の多くは、漁業を生業としていましたが、多くの船も家屋と一緒に流されてしまったということです。台風が去った地域では、住民の方々の手による住宅の清掃や再建が始まっていました。



<フィリピン被災者緊急支援活動街頭募金>

10月17日にフィリピン地震、11月18日にフィリピン台風の被災者緊急支援活動に対する街頭募金をそれぞれ実施しました。募金活動には岡山倉敷フィリピーノサークルの皆さん、AMDA 中学高校生会のメンバーにもご参加いただきました。募金にご協力いただいた方々、誠にありがとうございました。（小川 直美）

パキスタンおよびアフガニスタンにおける人道支援活動



8月にパキстанを襲った洪水被害に対し、AMDAR と長年協力関係にあるハムダード財団が9月9日に現地で食糧支援を行いました。対象地域となったのは被害が深刻だった北西部カイバル・パクトウンクワ州ブネール県です。AMDAR からの支援を含む計 800 袋の食糧が同県の4ヶ所で配布されました。

一方、隣国のアフガニスタンでは、AMDAR アフガニスタン支部が中心となり、パキスタンやイランから強制送還された帰国者を支援しました。2021年8月にタリバンが政権を奪還して以来、多くの市民が近隣諸国に逃れました。他方、渡航先の国々では、このところ、難民に対する在留資格の規制を強化

する動きが見られ、多数の避難者が国外退去となっています。

強制送還後、貧困に喘ぐ帰国者をサポートするため、同支部が運営する『日本アフガニスタン友好病院』において、無料の医療相談と治療が行われました。初回の支援では、子どもや女性、高齢者などを中心に計 542 人が受診しました。受益者からは継続的な支援を切望する声が寄せられています。(近持 雄一郎)



ウクライナ人道支援活動

AMDAR は現在、4つの現地団体と協力して、ウクライナでの支援活動を継続しています。

「首都キーウにある大手医薬品卸売業者の倉庫が爆撃され、医薬品の供給に大きな影響が出ている」「ウクライナ全土で停電が頻発しており、地域によっては停電している時間の方が長い」「停電時に使用する発電機の燃料価格がすでに高騰している上、冬に向けて燃料の需要が高まる」— このような厳しい状況に挫けることなく、各団体とも対策を取りつつ活動を続けています。



11月末、前線から近い都市ハルキウにある医療機関『ダイナスティメディカルセンター』とオンライン会議をした際、画面越しには聞こえませんでしたでしたが、会議中も空襲警報が鳴っていたことを知りました。同センターのディレクターによると、頻繁に警報が鳴るのは日常的なことであり、ハルキウ市民の大半は避難しないということです。このようなサイレンの音が響かない日常が戻ることを願い、AMDAR はこれからも支援を継続していきます。(岩尾 智子)



ルワンダ学校保健プロジェクト



AMDAR は2015年より特定非営利活動法人『ルワンダの教育を考える会』とともに、ルワンダで学校健診活動を行ってきました。今年度も、同国南部州ギサガラ地区キビリジ小学校で、キビリジ地区病院の協力のもと、学校健診を行いました。

健診は9月24日から26日の3日間の日程で行われ、1,030人の子どもたちを対象に実施することができました。

健診を受けた子どもたちの約20% (203人) に健康上の問題が見つかりました。その多くは頭部白癬や虫歯など、生活環境や習慣の問題に起因するものでした。

また、多くの保護者がこうした子どもたちの健康問題について認識していなかったり、誤った民間療法に頼ったりしていることがわかりました。

そのため、健康問題が指摘された児童の保護者に対して、健康に対する理解を深めてもらい、地域医療機関への受診を促すため、健康教育キャンペーンが11月6日と7日に行われました。

今後もルワンダの子どもたちの健康水準の向上を目指して、学校健診を行っていきます。(小川 直美)



インド・ビハール州ブッダガヤ訪問記 (2025 年 11 月)

AMDA はインド・ビハール州ブッダガヤにて、母子保健事業をはじめ、地域コミュニティを中心に無料で食事を提供する『AMDA あおぞら食堂』、農業事業、現地協力団体が運営する『お年寄りの家』への支援など、多岐にわたる活動を展開しています。さらに今年は水害の被害を受けた村への緊急支援にも取り組みました。

11 月 21 日から 26 日まで AMDA 副理事長とインド担当職員がブッダガヤを訪問しました。

地域の活動拠点となっている『AMDA ピースクリニック』(APC) では、妊産婦の定期健診日に、40 人近くの妊婦さんや、生後 1 か月の赤ちゃんを連れた母親た



定期健診を受ける妊婦さんたち

ちが、地元の産婦人科医による診察を受けるために集まりました。

また、別の日に実施したマタニティークラスにも、多くの参加がありました。スタッフが血圧測定や個別相談を行い、「授乳」をテーマに母乳育児のメリットや、授乳中に特に必要とされる栄養について説明をしました。

このほか、『AMDA あおぞら食堂』にも、周辺地域から多くの子どもや大人が集まり、美味しそうに食事をしていました。インドでは手で食べる習慣があり、食事の前後に手を洗うことが重要です。あおぞら食堂でも衛生面に十分配慮して食事を提供しており、衛生管理と食生活の大切さを伝える良い機会になっていると感じました。



AMDA あおぞら食堂の様子

一方、APC の元スタッフが運営する『お年寄りの家』(老人ホーム) には、必要に応じて支援を行っています。今年 6 月には、モンスーンの暴風雨で被害を受けた屋根やキッチンなどの修復工事を支援しました。今回の訪問中に、お年寄りや周辺の村の子どもたちにビスケットを配布したりしました。

加えて、この夏の水害で被災した村にも訪問しました。AMDA が被災直後に支援活動を行った際には、水害により全壊していた家は藁と竹などの植物と土で建て直されていました。住民によれば、現在は政府からの食糧支援があるため、何とか生活を維持できているとのことでした。これからも AMDA はブッダガヤでの支援を継続してまいります。今後とも皆さまの温かいご支援を心よりお願い申し上げます。(あるちゃん ジョシ)



『お年寄りの家』を訪問

AMDA ネパール支部が運営するダマック病院で CT 検査開始

ネパールにある AMDA ダマック病院は、多くの診療科に加えて ICU・HCU・NICU も備え、年間 3 万 9,000 人以上が受診する地域の中核病院です。遠くから 1 日かけて通う患者も多く、1 日に 15 ～ 20 件の手術や分娩を行うなど、地域医療を支える大きな役割を果たしています。しかし、これまでは CT がなく、けがや脳卒中、腹部の疾患などの診断に時間がかかり、治療の遅れが課題でした。また、他院で CT を受けると費用が高く、特に貧しい家庭には大きな負担でした。

こうした状況を改善するため、日本からも一部資金援助を行い、2025 年 9 月、ダマック病院にキャノン製 160 スライス CT が導入されました。CT 検査費用は他の民間病院より 10 ～ 20% 安く、経済的に厳しい人には減免制度もあります。

導入後は迅速で正確な診断が可能になり、患者が CT のある遠方の病院を受診する負担も減りました。患者からは、「地元で最新の CT 検査を受けられるようになったことに感謝している」と多くの声が寄せられています。AMDA は今後もネパール支部が運営するダマック病院を含む 3 つの病院を支援していく予定です。(あるちゃん ジョシ)



CT スキャンを受ける患者さん

現在ご寄付受付中の活動

- ・緊急救援
- ・ウクライナ人道支援
- ・AMDA フードプログラム
- ・ルワンダ学校保健
- ・カンボジア
- ・ネパール医療支援
- ・インドピースクリニック
- ・内視鏡技術移転
- ・AMDA 中高生会
- ・こども食堂支援
- ・災害事前対策
- ・東日本大震災 (3 月 31 日まで)

使わないで眠っている年賀はがき、官製はがき、切手はありませんか

はがき、切手は未使用のものであれば、古いものでも差し支えありません。ご協力よろしくお願いいたします。

書き損じはがき、未使用切手等を
右記までお送りください。



〒 700-0013
岡山県岡山市北区伊福町 3-31-1
特定非営利活動法人 アムダ
「書き損じはがき・切手」担当 行



AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム関連の活動について

2025 年 10 月 20 日、岡山市にて、『第 7 回 AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム連携会議』を開催しました。

これまで、「調整会議」として開催してきましたが、関係各所とのさらなる連携の強化と、より円滑な情報共有を図るため、今回より名称を「連携会議」と改めました。

自治体、医療機関、企業、団体、教育機関など、四国をはじめ、全国各地より多くの関係者の皆さまにご参加・ご協力いただき、誠にありがとうございました。

また、協力自治体で開催されている防災訓練にも、AMDA から様々な形で参加させていただきました。10 月 26 日の徳島県阿南市の防災訓練には、長野県諏訪市から諏訪中央病院の医療チームと AMDA 兵庫が参加し、徳島県美馬市からはハウエツ病院の皆さんが AMDA チームとして参加してくださいました。

11 月 16 日に高知県黒潮町で行われた防災訓練では、午前 8 時 30 分に四国沖で南海トラフ地震が発生した想定で避難訓練が行われ、町内各地区で一斉に命を守る避難行動がとられました。その後、災害対策本部訓練として、災害発生から 48 時間が経過したという想定のもと、情報伝達訓練が実施されました。岡山にある AMDA の事務所でも、同様の想定で、遠隔でこの訓練に参加しました。（大西 彰）



日付	場所	名称	内容
10 月 20 日	岡山県岡山市	南海トラフ災害対応プラットフォーム連携会議 会議	
10 月 24 日	徳島県美馬市	徳島県防災訓練	見学
10 月 26 日	徳島県阿南市	阿南市防災訓練	救護所訓練
11 月 16 日	高知県黒潮町	黒潮町防災訓練	通信訓練
12 月 6 日	岡山県総社市	総社市防災訓練	パネル展示

公益財団法人大原芸術財団と包括連携協定を締結

岡山県倉敷市にある大原芸術財団は、大原芸術研究所、大原美術館、倉敷考古館の運営と、芸術文化の研究に情熱を注いでいます。11 月 19 日に行われた締結式には、大原芸術財団の大原あかね代表理事と AMDA の佐藤拓史理事長が出席し、協定書に署名しました。大原代表理事は、医療とアートが手を結ぶことは岡山ならではの取り組みだとしうえて、「アートには、人が生きようとする力を支える力がある。医療や人道支援で救われた命に寄り添う形で、少しでも役立てばうれしい」と述べました。佐藤理事長も「芸術の力を通じて、被災者や派遣者をはじめ、多くの方々に寄り添う新しい社会貢献のかたちを実現したい」と語りました。今後の具体的な活動については、現地の医療現場の視察や意見交換を重ねて検討を進め、医療とアートが連携した新たな可能性を探ります。（難波 妙）



AMDA 中学高校生会活動報告

< 10 月：倉敷国際ふれあい広場 >

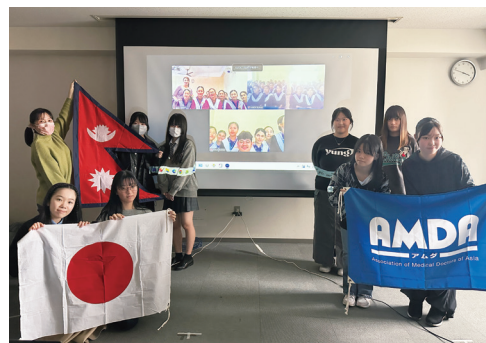
10 月 19 日、倉敷芸文館で開催された『倉敷国際ふれあい広場』にて、AMDA 中学高校生会（以下、中高生会）が昨年に続き 2 回目のパネル出展を行いました。

今年はより多くの方に AMDA の活動を深く知っていただけるよう、手書きの説明文やメンバーのコメントを添えて展示しました。当日は幅広い世代の方に来場いただき、「AMDA がこんなに多くの国で活動しているとは知らなかった」「若い世代が積極的に取り組んでいて素晴らしい」といった温かいお声をかけていただいて、非常に嬉しかったです。



< 11 月：ネパールオンライン交流会 >

AMDA ネパール支部が運営する看護学校の学生と、オンライン交流会を実施。「医療」「防災」「衣食住」「言語」をテーマに、全編英語で意見交換に挑戦しました。両国とも英語は第一言語ではありませんが、中高生会の主体性をより尊重し、最低限の通訳と事前の準備、大学生ボランティアの協力を得ながら、思いを伝えることができました。ネパールについての知識が深まっただけでなく、オンライン上や英語で自分の考えを伝えることの難しさについても学ぶことができた有意義な機会となり、メンバーからも前向きな感想が寄せられました。



< 12 月：AMSA Japan x 中高生会オンライン交流会 >

AMSA Japan（アジア医学生連絡協議会日本支部）と中高生会のオンライン交流会を開催しました。中高生会は岡山県内の学生を中心に活動している一方、AMSA Japan のメンバーは全国各地に在籍しており、活動の多くをオンラインで行っています。中高生会においても、近年、県外からの問い合わせが増えていることから、今後活動の幅を広げていきたいという思いがあり、そのきっかけの一つになればとの期待を込めて、今回はオンライン形式での実施となりました。

初回となる今回の交流会では、各団体紹介の後、少人数のグループに分かれて交流を深め、会の最後には、今後の連携について意見を出し合い、交流会を締めくくりました。今後も、今回出されたアイディアをもとに、AMDA の理念を共有する若者団体同士が連携し、共に活動できる場を構築していきたいと考えています。（金高 摩耶）



AMDA ボランティアふれあい交流会

日頃より AMDA の事務所で様々な作業に協力してくださっているボランティアの皆さんと、本部職員がふれあう、『ボランティアふれあい交流会』が 11 月 7 日に開催されました。1995 年の阪神淡路大震災の時より活動に参加してくださっている方から、20 代の方まで、幅広い世代が参加してくださいました。佐藤理事長の挨拶に続いて、各位が自己紹介を行い、なごやかな歓談のひと時となりました。

また、難波副理事長から AMDA の活動概要について説明があったほか、直近の活動として、先ごろのフィリピン地震で被災者救援活動に従事した小川看護師から報告がありました。

ボランティアの皆さんからは、「何歳になっても、身体の続く限り、社会の中で誰かの役に立ちたい」「ボランティアを続けていきたい」という声が聞かれ、前向きなエネルギーが伝わってきました。AMDA の活動が多くのボランティアさんに支えられていることに改めて感謝し、皆さんにお礼を申し上げます。（難波 比加理）

